日銀事務所長の
あさひかわ経済ウォッチ 9

近づく新紙幣の発行

新しい紙幣の発行が始まる7月3日まで、あと1カ月余りとなりました。

これまで約40年にわたって一万円札の顔を務めた福沢諭吉、そして約20年間、五千円札と千円札の顔を務めた樋口一葉、野口英世から、それぞれ渋沢栄一、津田梅子、北里柴三郎にバトンが引き継がれます。

現在、日本銀行では、国立印刷局からの新紙幣の引き取りや全国の拠点への備蓄など、所要の準備を進めています。日本銀行には様々な機能や業務がありますが、その役割を一言で表すと、「人々が安心してお金を使えるようにする」ということです。今回の改刷についても、その観点から入念に準備作業を進めているところです。

ところで、トリビアのような話で恐縮ですが、「F券」という言葉が何を指すかご存じでしょうか。紙幣（銀行券）には、明治以降、分類記号が付されており、改刷の都度、変更されています。当初は、「甲」「乙」「丙」などでしたが、1946（昭和21）年以降は、Aから順にアルファベットが使用されてきました。現在発行されている一万円札、五千円札、千円札は、戦後5番目のシリーズを示す「E」という記号を頭につけて、それぞれE一万円券、E五千円券、E千円券と呼ぶことがあります。そして、7月3日に発行が開始される新たな紙幣では、「F」という記号が割り当てられることになります。普段の生活ではこうした記号を付けて呼ぶ機会はありませんが、金融機関や関係企業の担当部署などでは、紙幣の種類を区別するため、この記号は重要な役目を果たしているのです。

備蓄時の外観イメージ。1万円札の場合、1台で40億円（約400㌧）あります

さて、お金をめぐっては、近年、キャッシュレス化が進展しています。しかし、現金に対しては引き続き根強い需要があり、決済手段として今後も大きな役割を果たしていくことが見込まれます。こうした中、現行の紙幣は、発行開始から約20年が経過しています。この間、コピー機などの印刷技術の進歩は著しく、中長期的な偽造抵抗力を確保していく必要があります。このため、新紙幣では、最新の偽造防止技術として、お札を傾けると三次元の肖像が回転する3Dホログラムや、すかしには肖像の背景に高精細の模様が採り入れられていますので、お手元に届いた際にはぜひご確認ください。

また、デザイン面についても、いわゆる「ユニバーサルデザイン」と呼ばれる、誰もが利用しやすく分かりやすいということを意識した改良が進められています。額面数字（アラビア数字）を大型化しているほか、指で触って券種を識別するマークをよりわかりやすい形状にし、券種毎に異なる位置に配置するなどしています。ちなみに、こうした機能性やデザインに着目して、昨年、あさひかわデザインウィークにおいてパネル等の展示や解説をさせていただきました。

新紙幣は、発行開始日以降、日本銀行から金融機関に支払われ、準備の整った金融機関の窓口やATM等から順次入手が可能となります。このため、皆様のお手元に届くタイミングにはバラツキが生じます。また、現行の紙幣は、新しい紙幣が発行された後も通用します。「従来の紙幣が使えなくなる」といった誤った情報や詐欺行為には、くれぐれもご注意ください。ここ旭川でも、道北地域への紙幣供給の拠点として、金融機関や関係企業の皆様と協力しながら、引き続き、気を引き締めて業務に取り組んでいきたいと思います。

（毎月第四週に掲載します）

【足立祐一（あだち・ゆういち）】 一九七三年、大分県出身。九州大学経済学部卒。金融市場局企画役、国際局企画役、ドイツ・フランクフルト事務所長、調査統計局地域経済調査課長を経て、二〇二三年、旭川事務所長に就任。